

京都大学	博士（文学）	氏名	朝倉 慎人
論文題目	ポスト・マスツーリズム時代の農村における生活空間の観光化に関する地理学的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は、文化論的転回以降の新しい観光地理学における観光空間の理解に立ち、特にバブル経済の崩壊とともにリゾート開発ブームが終焉した1990年代以降に焦点を当てて、日本の農村空間における観光振興の地域的展開の特徴を、地域が埋め込まれた地理的、社会的、経済的文脈や、それらを背景とした観光実践者・観光業従事者（ホスト）の実践や思いに注目して検討するものである。</p> <p>第1章「はじめに」では、本研究の問題意識と研究目的を概略的に示す。1990年代以降、日本の農村部における観光開発・観光振興をめぐる、「新しい観光」が有力な手法として注目されるようになった。「新しい観光」は地域づくり・まちづくりと地続きとなって、観光開発・観光振興の地域的展開をめぐる議論におけるホストの位置づけに修正を迫る。すなわち、現代日本の観光現象の地域的展開をめぐるには、観光業従事者のみならず、その周辺にあって地域で生活する「普通の」住民も含めた多様なホストの存在が、実践の成否をはかる参照枠となり、観光資源化した「ありのままの地域資源」に付随する重要な要素となっている。第1章では、こうした事実を確認するなかで、現代日本における観光現象の地域的展開をとらえる際の現実的課題として、多様なホストの思いや実践に注目することの意義が強調される。</p> <p>第2章「先行研究の成果と課題」では、観光地理学と周辺諸分野における既往研究を吟味し、観光地理学の陥穽と課題を整理することを通じて、第1章で概略的に示した本研究の問題意識と研究目的を明確化する。本研究では、文化論的転回以降の新しい観光地理学の潮流をふまえて、1990年代以降の「新しい観光」による観光開発・観光振興のもとで生じた文化や空間の商品化の様態を、ホストの側から検討する。資本主義社会の成立・成熟と深く関わって成立した観光空間は、より広い政治的・経済的な力学に不可避免的に巻き込まれながら（再）生産され、交通手段の高速化、大量化、低廉化を背景に国内外のあらゆるところに及ぶようになった。そして、地域外部の主体の意図をとめないながら、さまざまな事物が観光資源として商品化されるようになった。農村空間においては、人々が抱く牧歌的情景を背景に、景観など当該地域の諸属性がルーラリティのシニフィアンとして選択される。そして、こうした傾向は、マスツーリズム型の観光開発に対する反省に立った「新しい観光」による観光開発・観光振興のもとでより一般的になっていく。「新しい観光」は、マスツーリズムに対するアンチテーゼに彩られるため、日本においては、リゾート開発主導の地域活性化へのアンチテーゼとしての地域づくり・まちづくりと接近した。したがって、「新しい</p>			

観光」による観光開発・観光振興の特徴をとらえるためには、地域の社会・経済的構造や景観、あるいは文化への外形的な影響だけでなく、広く地域づくり・まちづくりをめぐる地域住民の意識や実践を分析の俎上に載せることが必要になる。加えて、それは地域住民が彼（女）らにとって「当たり前に見える光景」のなかに新たな価値を見出し、それらを観光資源として磨き上げるといった手続きを踏むことが多い。すなわち、「新しい観光」の潮流は、実働部隊として、実践の成果を評価する際の参照枠として、場合によっては観光資源として、広く地域住民を観光業の直接的かつ重要な担い手として取り込むこととなった。こうした地域住民の存在は、既往研究が前提としてきたような、観光（客）のまなざしの受容や文化の客体化に積極的かつ戦略的に対応するようなホスト像からはこぼれ落ちてしまう。そこで本研究では、生活空間の観光化という視座を導入して、文化や空間の商品化をめぐるホスト像を拡張するとともに、そうしたホストの、時に生活者としての立場を崩さないで行う観光実践に注目することで、彼（女）らのきわめて個人的な思いや葛藤が編み込まれた構築物として観光開発・観光振興の地域的展開をとらえることを目指す。

第3章から第5章では、第1章と第2章で整理した問題意識に即した具体的な事例研究を展開し、観光業従事者だけでなく、観光実践者や観光業非従事者の「実践」にも目配りしながら、生活空間の観光化の諸相とその地域性を規定する重層的な文脈を明らかにする。第3章「生活空間の観光化とホストの対応」では、徳島県三好市東祖谷地域（旧東祖谷山村）における観光まちづくり事業や同時期に始まった民泊体験事業を事例に、ホストの実践のあり方を、地域の生活者としての彼（女）らが共有する生活感覚に注目して検討する。東祖谷地域における観光まちづくり事業をめぐっては、コンサルタントの中心となる人物が提示する観光（客）のまなざしのもとで、地域の景観だけでなく地域住民やそのいとなみが中心的な観光資源と位置づけられた。第3章では、この明確な観光（客）のまなざしを背景に実施された観光振興が生活空間の観光化をとまなうものである点に注目して、担い手の思いや実践のあり方を検討し、生活空間の観光化と地域を取り巻く社会経済的環境との関係を明らかにすることになる。当地の観光実践者に特徴的な、生活感覚と自由裁量にもとづく個人的な実践は、彼（女）らが観光業に対する周囲の人々の無理解をかわすために選択したものであった。そして、当地の地域住民が観光業や観光振興に理解を示しにくい背景として、都市部からの遠隔性、基幹産業と観光業の関係、過疎、マスツーリズム型観光地との隣接関係といった地理的環境の重要性を指摘した。

続く第4章「農村空間の商品化とホストの葛藤」では、群馬県みなかみ町旧新治村の体験型観光地たくみの里を事例に、観光業に直接的・間接的に寄与する地域住民や観光業従事者の思いや葛藤と、実際の生活空間の観光化・商品化の様態との関係を検討する。たくみの里が位置する旧新治村は、東京大都市圏の縁辺部に位置し、高度経

済成長期に北部の温泉地などで観光開発が進展した地域である。しかし、たくみの里は1980年代半ばまで観光地化と無縁な農業地域であり、当初から農村らしさを核とした観光地化が模索されてきたものの、そのとらえどころの無さから、現在もなお地域の統一的なアイデンティティが曖昧である。第4章では、この地域のアイデンティティをめぐる関係者の思いや葛藤に注目するなかで、観光実践者・観光業従事者の実践を、観光業非従事者を含む地域内の他者との密接な関わりのなかで理解し、生活空間の商品化が観光業従事者をめぐる地域社会内部の対抗関係と不可分の現象であることを明らかにすることになる。当地では、関係者の多くが地域アイデンティティの根源を真正なルーラリティ（農村らしさ）に求め、その結果として、真正なルーラリティを根拠とする多様な「真正」なたくみの里像（イメージ）が提示され、相互に矛盾をはらみながら並立するようになった。「真正」なルーラリティの構築が重視される当地では、ルーラリティの存立に資する実践が、地域の存立に資する実践として評価されるため、「真正」なルーラリティの構築に引き付けることで、観光業従事者は地域内の他者に対して自らの実践の正統性を主張することができる。すなわち、当地の相矛盾するたくみの里像の並立状態は、観光業従事者・非従事者間の緊張関係の帰結として理解することができる。

以上2つの事例では、生活空間の観光化に対するホストの積極性に違いがみとめられるものの、いずれもホストが地域内の他者を強く意識した実践を行っている。そこで第5章「観光振興を受容したホスト社会と村落共同体的な論理」では、この地域内の他者の存在が、いかにしてホストの実践のあり方を規定するか、という点に注目する。具体的には、第3章で論じた東祖谷地域の中央部に位置し、集落の大部分が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている落合集落を事例に、相互に意識し合う観光実践者・観光業従事者と観光業非従事者が実践の前提としてきた村落共同体的な論理に注目して、古民家宿泊事業をめぐる集落住民の思いや実践のあり方を検討する。そして、当地における観光まちづくりの受容のあり方を、集落における位置づけが不明瞭な新規の取組みを前にして、集落住民が自らの行動の指針を村落共同体の構成員としての彼（女）らが共有する論理に求め、それらに照らしながら手探りで行動を選択した結果として描き出す。

以上の議論をふまえて、第6章と第7章では、本研究の成果と課題を整理する。まず第6章「考察」では、第3章から第5章の事例研究で得られた知見を整理し、特に「新しい観光」にともなう文化や空間の商品化とホストの関係をめぐる議論を念頭に、成果と課題を提示する。観光にともなう文化や空間の商品化をめぐる既往研究は、それらを必ずしも客体化できないホストのあり方を積極的に論じてはこなかった。それに対して本研究では、生活空間という概念を持ち込みことで、生活者としての立場を崩さず、その意図と関わりなく直接的・間接的に観光振興に資する実践に携

わる地域住民のあり方を正面からとらえる。これによって、彼（女）らの実践を規定する地理的，社会的，経済的文脈への注目を促すとともに，そうした諸文脈に埋め込まれた存在としてのホストの思い，葛藤，実践が織り込まれた動的なプロセスとして，農村空間における文化や空間の商品化をとらえ直す。すなわち，観光業従事者，観光実践者が自らの内面に関わる個人的な思いや感覚に導かれた実践を行い，それらが絡み合い，相克し，すれ違うなかで関係論的に成立するものとして，商品化の過程をとらえることとなる。そこでは，彼（女）らの不作為の実践や観光業非従事者の存在も重要な働きを演じている。あわせて第6章では，「新しい観光」による観光開発・観光振興の地域性の解明を見据えて，こうした生活空間の観光化の地域性やそれを規定する諸文脈を整理し，残された課題を指摘する。生活空間の観光化は，ホストの個人的で排他的な内面世界と，生活者としてのホストが不可避免的に埋め込まれる外的世界との接面で生じる複雑な現象である。したがって，ホストの実存と彼（女）らを取り巻く諸文脈との関係性の詳細な分析が今後の課題となる。また，共同体的な論理の地域性やその強弱に注目して，こうした現象の地域性を本格的に議論することも重要な地理学的課題となるだろう。

続く第7章「終わりに」では，一連の研究のまとめとして，本研究の知見を観光地理学の研究史に再定置する。本研究の主要な成果は，生活空間の観光化という視座を導入することで，現代日本の農村空間における観光開発・観光振興の地域的展開を，地域を取り巻く社会経済的環境（第3章），地域内の社会的関係性（第4章），村落共同体的な論理（第5章）といった，地域社会が組み込まれた重層的な文脈に着目して理解することを可能にした点にある。このように，観光実践者を含めた幅広いホストの思い，葛藤，実践のあり方に目配りし，そうした実践が埋め込まれた地理的，社会的，経済的文脈を重視する視座は，ポスト・マスツーリズム時代の観光開発・観光振興の地域的展開の特徴を理解するのみならず，広く観光空間の（再）生産や変容のあり方を議論する際にも有効な視点となる。本研究の知見をふまえると，現代の農村空間における観光開発・観光振興の地域的展開をとらえるためには，政治的・経済的な力学に不可避免的に巻き込まれた観光空間をめぐる大きな政治性の問題よりも，ホスト社会内部で働く微細な権力の問題を深く議論することが必要であるように思われる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本の農山村に広がりつつある、ある種の今日的な観光のあり方について、観光客を迎える住民の立場や理解に注意して、批判的に捉えた地理学的研究である。過疎・高齢化が進展する農山村では、都市からの観光客が思いえがく農村景観や田舎の生活を提示することで、観光業の振興を期待する動きがある。そうした観光のまなざし（ツーリスト・ゲイズ）に呼応したツーリズムは、日本を含め、世界各地でみられ、観光地理学やその関連分野では多くの研究が蓄積されている。しかし、観光化の成功事例がよく紹介される一方で、農村らしさ（ルーラリティ）を無意識的に体現する住民の立場や理解は、観光地理学の関心の周辺に置かれてきた。とりわけ、住民（ホスト）の日常生活そのものが観光客（ゲスト）の訪問目的となるという現象は、両者の間に同床異夢的な関係を作り出す。こうした関係が農山村とその住民にもたらす新たな影響や作用への関心が、本論文の出発点となっている。

本論文は序にあたる第1章、既往研究の整理と研究の枠組みを提示する第2章、第3章から第5章にわたる3つの事例研究、考察にあたる第6章、結びにあたる第7章からなる。以下、第2章から第6章を中心に、本論文の意義を整理する。

第2章では観光地理学とその関連分野、すなわち観光学や観光社会学、農村地理学の成果が整理され、今日のツーリズムが求めるルーラリティを構成する住民を捉えるための理論的枠組みが議論される。著者は、観光のまなざしを必ずしも十分理解しないまま、日常生活を観光客に提示する住民のあり方が、結果的に観光客の期待に応えるという現象に着目し、これを「生活空間の観光化」と位置づける。

続く第3章は、「生活空間の観光化」の典型例として、徳島県三好市東祖谷地域における「観光まちづくり」と住民の実践に注目する。「秘境」や「隠れ里」という観光のまなざしへの積極的な対応を軸とする行政の方針とはうらはらに、観光客を住居で受け入れたり（民泊）、伝統的な生業を体験させる活動は、住民にとっては日常生活の延長にある。高齢化が進む住民は、観光業の成功や維持を意欲的に目指しているわけではないために、結果として、意図しないままにルーラリティを体現することになる。しかし、こうした状況が必ずしも観光業の持続的な進展を約束するものではないことを、著者は示唆している。

対して第4章では、より意図的にルーラリティを提示する農山村において、別の問題が生じることが議論される。事例となった群馬県みなかみ町の体験型観光地では、目標となった農村らしさをめぐって、観光実践者とそうでない住民の間で葛藤や矛盾が生じ、それらを抱えながら観光地としてのあり方が模索されることになった。集客のために、当該地域の生活や生業に必ずしも由来しないルーラリティが観光客に提供され、その「真正」さが揺らぐという状況は、人為的に創出された農村らしさが抱える問題をよく示している。

こうした人為的なルーラリティの提示は、農山村の社会構造と不可分の現象としても捉えられる。第5章で著者は、ふたたび徳島県三好市東祖谷地域の事例に立ち戻

り、重要伝統的建造物群保存地区が設けられたある集落の観光事業に着目する。その観光事業（古民家宿泊）は、地域外の事業者によって、観光のまなざしを前提として導入された。しかし住民は、ルーラリティを意識してこの事業を支えているわけではない。むしろ、村落共同体的な論理のなかで一定の支持と協力を行うことで、結果的に事業が成立している。住民の間には事業をめぐる温度差はあるものの、集落の事業に準じるものであるように位置づけられるが故に、提示されるルーラリティが争点にならないと著者は指摘する。

以上の事例研究を承けて、第6章ではルーラリティが観光の対象となり、意図的に、また無意識的に提供される状況において、ホストとなる住民の理解や立場が議論される。日常の生活空間を観光客に提示する農山村の住民にとっては、地域外からもたらされる観光のまなざしは、一面では理解を越えたものであり、他方では葛藤や矛盾を引きおこす。著者の議論は、それらが住民の生活のなかで受け流され、あるいは地域の社会構造のなかで表面的に処理されていくことを示しており、今日的な観光のあり方が農山村に与える影響を深く理解する必要を説くものだといえる。

以上、本論文は、観光地理学および関連分野の近年の問題意識を踏まえ、農山村の住民がホストとして観光に関わることの意味を、丁寧に探求した研究として高く評価される。その際、いずれの事例地でも、住民の多くから時間をかけて聞き取りを行い、意見や温度の差に注意しながら、丁寧に分析を進めていることも、評価されるべき点である。なお、第3章と第4章はすでに地理学の学術誌に掲載され、5章についてもその準備中であることを申し添える。

一方で本論文には課題も残されている。いくつか鍵となる概念には、より厳密な定義づけが求められる。また、現地での聞き取り調査の過程についても、著者の立場性を示すべく、より明確に開示するのが望ましい。さらに本論文は、農山村の住民の振る舞いに焦点を絞っているために、都市住民との交流や「関係人口」の創出に活路をみいだす農山村のあり方については、必ずしも議論に組み込めていない。著者にとっては、地域外から与えられた安易な「観光のまなざし」や処方箋が、必ずしも農山村の住民一人ひとりに届いていない実情を批判的に捉えることが重要であり、彼／彼女らが置かれている構造を精緻に捉えた本論文の意義は、十分に評価される。しかしながら今後は、研究者として現実の農山村にどうコミットしていくべきかという問いに、向き合う必要があるだろう。住民の理解や立場を掘り下げた著者だからこそ、今後、研究活動を通じて、この問いに答えを出してくれることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和5年2月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。